

(3) 大学院研究科における教育課程等

(大学院研究科の教育課程)

- 大学院研究科の教育課程と各大学院研究科の理念・目的並びに学校教育法第65条、大学院設置基準3条第1項、同第4条第1項との関連（A群）大学院
- 「広い視野に立って清深な学識を授け、専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養う」という修士課程の目的への適合性」（B群）大学院
- 「専攻分野について、研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養う」という博士課程の目的への適合性（B群）大学院

本学大学院は、文学研究科英語英文学専攻、生活科学研究科食物栄養科学専攻のように基礎学科の上に立つ煙突型と文学研究科日本語日本文化専攻、国際社会システム研究科国際社会システム専攻のように学芸学部あるいは現代社会学部を基礎とした学部煙突型研究科・専攻で組織されており、それぞれに基礎となる学部・学科の専門性を追及すべく各研究科・専攻は体制を整えることとしている。

教育課程について、博士課程（前期）および修士課程においては、専攻分野における研究能力および高度の専門性を培うためのA類科目と、このA類科目を補完し幅広い視野を身につけるためのB類科目より構成されている。博士課程（後期）においては、指導教授の指示により、より高度な専門性を培うべく科目を履修し、場合によっては博士課程（前期）の科目を履修することも可能となっている。これらの課程は、全て指導教授のものと科目を履修し、研究活動を行うこととしている。

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（前期）】

大学院研究科の教育課程と各大学院研究科の理念・目的並びに学校教育法第65条、大学院設置基準3条第1項、同第4条第1項との関連
--

文学研究科英語英文学専攻博士課程（前期）は、学芸学部英語英文学科の教育を基礎として、その上に成り立つ高度の専門教育を行うべく、英米の文学・文化および英語学・言語学・英語教育の研究を深めながら、国際的な視野に立って専門の知識を用い、国際的指導力を有する人材や優秀な研究者を養成することを目的としている。
--

A類科目に設置されているの科目は英米文学についての特殊研究と言語学についての特殊研究であり、B類科目はこれを補完し幅広い視野を身につけるため科目群が用意されている。A類・B類科目をあわせて30単位以上履修しなければならないが、A類科目から16単位以上を、しかも文学を修士論文のテーマとする者は、英文学特殊研究および米文学特殊研究より12単位以上、言語学をテーマとする者は言語学特殊研究より12単位を履修することが義務づけられて

いる。これらは本課程の理念・目的などに適するように設けられたものである。 「広い視野に立って清深な学識を授け、専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要の高度の能力を養う」という修士課程の目的への適合性 文学研究においては、A 類科目群の『英文学特殊研究 ・ ・ 』において、英米の演劇、英詩(ロマン派まで)、英詩(ロマン派以降)などの授業が行われており、さらに『同・特殊研究 』では文学とジェンダーをテーマにした授業が行われている。また、言語学研究においては『言語学特殊研究 ・ ・ ・ 』において、意味論・語用論、生成文法理論、英語コミュニケーション論、第二言語習得論、英語教育学方法論と第二言語習得論といった授業が行われている。 また、B 類科目群においても『比較文化特講』(マルチ文化理解)や『西洋古典文学研究』(ギリシャ・ローマの文学)、『古典語』(ラテン語)といった多彩な授業が用意されている。 学生の履修法については、前項において述べたように、これらの中から専門として研究する分野の授業だけでなく、他の分野の授業も多く履修しなければならないことになっているが、これらのバラエティーに富んだ授業が提供されているのは、専門とする英語英文学に関する学識だけでなく、広く文化・コミュニケーションについての学識をも授けようとするためである。
--

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（後期）】 大学院研究科の教育課程と各大学院研究科の理念・目的並びに学校教育法第 6 5 条、大学院設置基準 3 条第 1 項、同第 4 条第 1 項との関連 文学研究科英語英文学専攻博士課程（後期）では『英文学特別研究(・)』『米文学特別研究』『比較文学特別研究』『言語学特別研究(・)』『英語学特別研究』から 2 科目を履修した上で、論文指導を受けることが義務付けられている。 また、指導教授の指導によって、前期課程の科目を履修することが可能としている。これらはそれぞれの分野の研究をより専門的に学びながら、より広い視野を持った研究を展開できるようにするための配慮である。 「専攻分野について、研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養う」という博士課程の目的への適合性 英語英文学専攻の基礎とする英語英文学科は、ミルトン研究やシェイクスピア研究で知られており、それに関わる資料蓄積がある。英語英文学専攻の『英文学特別研究』の授業ではその学問的蓄積を活用した高度な授業が行われてきた。 近年ではそれに加え、キーツを中心とするロマン派詩、アイルランドの詩人シェイマス・ヒーニーなどの詩についての授業が行われており、『比較文学特別研究』においては西洋と東洋の詩の比較対照を研究する授業を設置した。これらにより英文学について一層広範で高度な研究が可能となっている。 また、『言語学特別研究』では日本の言語と文化に関する授業やコミュニケーション理論につ

いての研究も行われており、言語やコミュニケーションについての高度な授業が提供されている。学生は文学研究に関する授業および言語に関する授業の中から 2 科目 8 単位を履修しなければならない、また論文指導教授の指示により、博士課程（前期）の B 類科目を履修できることになっている。

これらのことによって、学生は「研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するのに必要な高度な研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養う」ことが可能となっている。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（前期）】

大学院研究科の教育課程と各大学院研究科の理念・目的並びに学校教育法第 65 条、大学院設置基準 3 条第 1 項、同第 4 条第 1 項との関連

日本語日本文化専攻では A 類科目から 20 単位以上を、B 類科目から 12 単位以上を修得しなければならないことになっている。ただし、A 類科目は日本文学・日本文化コース、日本語・日本語教育コース、音楽文化コース、情報文化コースの科目群に分けられており、その中のひとつのコースから最低 12 単位を修得しなければならない。

これによって、自分の研究の専門性を高めるとともに、各コースの研究に通底する考え方を広く理解することができる。これは専門分野が複合的に組織されている学芸学部を基礎としている専攻であるゆえに可能なことである。しかしまた、複数分野の知識を幅広く教授するということは、特定分野に絞って研究を深めるという意識に欠ける院生においては、マイナスに働く可能性もあり、学校教育法第 65 条「大学院は、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ」という目標が見失われる可能性がないわけではない。指導にあたって十分な注意が求められるところである。

「広い視野に立って清深な学識を授け、専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養う」という修士課程の目的への適合性

上述の履修の仕方は、文学研究科がリベラル・アーツ教育を基本とすることによるものであり、それが広い視野に立つ学識を養うことにおいて優れているということはこれまで繰り返し述べてきたところであるが、高度の専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養うという点においても、中学や高校の教員や日本語教員として活躍するに足る各専攻分野の専門性を育成し得る幅広い教育を達成できるカリキュラムであると考えている。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（後期）】

大学院研究科の教育課程と各大学院研究科の理念・目的並びに学校教育法第 65 条、大学院設置基準 3 条第 1 項、同第 4 条第 1 項との関連

文学研究科日本語日本文化専攻博士課程（後期）に設置されている『日本語特別研究』『日本文学特別研究』『日本文化特別研究』『芸術文化特別研究』といった科目は、博士課程（前期）において修得した知識と方法を更に深めるだけでなく、それらを有機的に関連させて新しい

「日本文化史研究」「日本文化方法研究」「日本文化内容研究」を目指すための科目である。 これは、文学研究科の理念・目的、および学校教育法第 65 条、大学院設置基準第 3 条第 1 項、同第 4 条第 1 項に記されていることに積極的に対応しようとするものである。
「専攻分野について、研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養う」という博士課程の目的への適合性 研究者として自立して研究活動を行う能力を養う教育という目的については、前述のカリキュラムとそれを支えている理念においては、十分に適合しているものとする。ただし、その成果が十分に上げられている分野とできていない分野とがある。 高度に専門的な業務に従事するのに必要な高度の研究能力およびその基礎となる豊かな学識を養うという目的については、修了生の職場をみても、一定程度適合的であると評価できる。

【国際社会システム研究科 国際社会システム専攻 修士課程】
大学院研究科の教育課程と各大学院研究科の理念・目的並びに学校教育法第 65 条、大学院設置基準 3 条第 1 項、同第 4 条第 1 項との関連 学校教育法 65 条の謳う「学術の理論及び応用を教授し、その深奥をきわめて、文化の進展に寄与する」は、とりわけその「応用」という部分が国際社会システム研究科の理念と合致している。すなわち、国際社会が生み出している諸問題は、単一の研究部門で分析しうるものではなく、インターディシプリナリーなアプローチを不可欠にしている分野である。 その点で国際社会システム研究科は、「国際協力」「国際交流」「文化と社会」という 3 つの視点・分野に渡る複合的な研究によって、国際社会の諸問題に主体的に格闘する研究者および現場実務者の育成を目的にしている。
「広い視野に立って清深な学識を授け、専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養う」という修士課程の目的への適合性 また、国際社会システム研究科の専任スタッフには、狭い意味での研究畑を歩んできた研究者だけではなく、国際機関および企業現場などの実績を積んできた研究者も多く含まれている。 また、学外の研究者や実務家による B 類科目も、国際環境マネジメント・国際観光文化など極めて実践的な分野における現実的課題を追究しており、高度の専門性と職業的諸能力の形成に大いに寄与している。

【生活科学研究科 食物栄養科学専攻 修士課程】
大学院研究科の教育課程と各大学院研究科の理念・目的並びに学校教育法第 65 条、大学院設置基準 3 条第 1 項、同第 4 条第 1 項との関連 生活科学研究科は、生活科学部食物栄養科学科を基礎とし、生活科学に関する研究を質・量ともに充実させるとともに教育を一段と飛躍させ、本学の立学の精神を遵守した高度な食生活指導者・研究者を養成することで、学界、社会及び家庭生活に寄与することを目的とし、大学

に係わる法的規定（学校教育法第 65 条並びに大学院設置基準第 3 条第 1 項）に対応し、また、基礎となる学科の教育内容を発展継承されるように両コースとも下記のようなカリキュラムを設定している。

〔食物栄養科学コース〕

「食品学」「調理学」「栄養学」の三分野に分けて科目を設定し、それぞれに開講テーマを持って専任の大学院任用教授が担当している。また、選択の幅を広げるために専任助教教授による半期科目や、他大学等から講師を招いて開講される食物学特別講義を設置している。また、1 年次秋学期 2 回、2 年次春学期 2 回、計 4 回の研究科セミナーを実施して文献紹介を行わせることで英語の読解力、プレゼンテーション能力の向上を図っている。

〔臨床栄養学コース〕

病態栄養学を中心とした科目と連携大学院として提携している病院での 1 年間のインターンシップを設定しており、医師と協力して病態栄養の症例研究が行える高度な職業人としての管理栄養士を育成することを目的としたカリキュラムとなっている。開講されている 10 科目のうち 4 科目（『臨床栄養学特殊研究 Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ』）に関しては、科目内容の性格上、それぞれの専門医と臨床現場で働く管理栄養士を客員教授として迎えてオムニバス形式で開講している。特にこの講義は、臨床現場担当者の生の声が聞けることもあり、学生の満足度が非常に高く、講義時間を大幅に超えて毎回講師とのディスカッションが続けられている。

以上の両コースのカリキュラムを鑑みたとき、生活科学研究科の教育課程は、研究科の理念・目的並びに学校教育法第 65 条、大学院設置基準第 3 条第 1 項を良く遵守し、具現化されているものとする。

「広い視野に立って清深な学識を受け、専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要の高度の能力を養う」という修士課程の目的への適合性

「広い視野に立って清深な学識を受け」るために「食物栄養科学コース」では、「食品学」の分野として『食品学特殊研究 Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ』を、「調理学」の分野として『調理学特殊研究 Ⅰ、Ⅱ』を、「栄養学」の分野として『栄養学特殊研究 Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ』を各 4 単位科目としておき、専任の大学院任用教授が受け持っている。さらに、選択の幅を広げるために専任助教教授担当による『食品ハイドロコロイド論』『食嗜好学特論』『栄養生理学特論』（各 2 単位）や、他大学等から講師を招いて開講される『食物学特別講義』（2 単位）を設置している。また、1 年次秋学期 2 回、2 年次春学期 2 回、計 4 回の研究科セミナーを実施して文献紹介を行わせることで英語の読解力、プレゼンテーション能力の向上を図っている。

一方、「臨床栄養学コース」においては、専任の大学院任用教授による『臨床栄養学特殊研究 Ⅰ』をはじめ、それぞれの専門医と臨床現場で働く管理栄養士を客員教授として迎えてオムニバス形式で開講している『臨床栄養学特殊研究 Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ』（4 単位）の他、集中講義として『臨床検査医学特論』『臨床心理学特論』『薬剤学特論』（各 2 単位）をおいている。

次に「専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要の高度の能力を養う」ために「食物栄養科学コース」では、『食物学特別研究』と題する 10 単位の科目を設定し各大学院任用教授の指導の下、実験中心の研究活動を行っている。「臨床栄養学コース」にお

いては、『臨床栄養学特別研究』（10単位）と題して1年間高度先進医療を実施している病院でのインターンシップを行う。その後、本研究科の大学院任用教授の指導の下、医師および管理栄養士と協力してインターンシップ先で行った病態栄養の症例研究を修士論文またはそれに代わる研修報告としてケースレポートをまとめる。『食物学特別研究』『臨床栄養学特別研究』とも集大成として修士論文発表会を催し、全教員に評価されるとともに、修士論文は研究指導教員である専任の大学院任用教授の審査を受け、「広い視野に立って清深な学識を受け、専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養った」か否かを判断している。

以上のことから、生活科学研究科の教育課程は、修士課程の目的に良く合致しているものと考ええる。

- 学部に基礎を置く大学院研究科における教育内容と、当該学部の学士課程における教育内容の適切性及び両者の関係（A群）大学院

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（前期）】

学部に基礎を置く大学院研究科における教育内容と、当該学部の学士課程における教育内容の適切性

英語英文学専攻は、英米文学と言語学・応用言語学・コミュニケーション論を中心とした教育課程である。

教育内容は、英米文学では演劇、英詩、小説などのカテゴリーにおいて、言語学・応用言語学では意味論と語用論、生成文法理論、英語コミュニケーション論、第二言語習得論などのカテゴリーにおいて、それぞれに英語英文学科の教育内容をさらに深く応用的・各論的に掘り下げたものとなっている。

両者の関係

学部では四本の柱、文学、言語、文化、コミュニケーションを柱として、教育内容が組み立てられているので、上記のとおり博士課程（前期）のものはそれを深化させたものとしている。

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（後期）】

学部に基礎を置く大学院研究科における教育内容と、当該学部の学士課程における教育内容の適切性

博士課程（後期）においては、学部の四本の柱、文学、言語、文化、コミュニケーションの上に、専攻で、さらにそれを深めるように、カリキュラムがおかれ、その専門を追求できるようにしてある。内容は、英米文学と言語学・応用言語学・コミュニケーション論を中心とした教育課程である。

教育内容は、英米文学では演劇、英詩、小説などのカテゴリーにおいて、言語学・応用言語学では意味論と語用論、生成文法理論、英語コミュニケーション論、第二言語習得論などのカ

テゴリーにおいてそれぞれに英語英文学科の教育内容をさらに深く応用的・各論的に掘り下げたものとなっている。

両者の関係

学部での四本の柱、文学、言語、文化、コミュニケーションは、博士課程（後期）まで一貫した教育内容の柱となるものであるので、学部での学びを基に博士課程（前期）で深化させた研究内容を、さらに、博士課程（後期）では国際水準の研究にまで到達させることができる。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（前期）】

学部に基礎を置く大学院研究科における教育内容と、当該学部の学士課程における教育内容の適切性

日本語日本文化専攻の研究分野は、発足当初、日本語研究、日本文学研究、日本文化研究、および芸術文化研究の4分野から構成されていた。

これらは、日本語日本文化専攻が基礎を置いた学部の日本語日文学科、音楽学科において取り上げられていた分野に対応するものである。

その後、学部に情報メディア学科が設置されたことにより、新たに情報文化に関わる研究が加わり、現在、日本文学・日本文化コース、日本語・日本語教育コース、音楽文化コース、情報文化コースの4コースに分けて、カリキュラム編成を行っている。

両者の関係

したがって、基本的には学部と日本語日本文化専攻の教育内容は極めて密接な関係にあり、一貫した教育内容を確保している。

ただし、学部においては、その理念にもとづいて積極的に各分野を広く学ぶように履修条件を設けているが、日本語日本文化専攻においては、各自の専門性を極めることを重視し、必要に応じて他分野の科目の履修を勧めているといった違いがある。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（後期）】

学部に基礎を置く大学院研究科における教育内容と、当該学部の学士課程における教育内容の適切性

日本語日本文化専攻博士課程（後期）に設置されている授業は、『日本語特別研究』『日本語文学特別研究』『日本文化史特別研究』『音楽文化特別研究』であるが、これらの科目は、博士課程（前期）に設置されている各コース(情報文化コースを除く)の学問を、より深く掘り下げるために科目群である。この科目群は、前述のように、学部各学科の専門分野に対応するものである。

したがって、基本的には博士課程（後期）におかれた科目は、学部各学科の専門分野に基礎を置いたものである。

両者の関係

したがって、博士課程（前期）と同様に、学部から一貫した教育内容を確保しているといえ

る。

【国際社会システム研究科 国際社会システム専攻 修士課程】

学部基礎を置く大学院研究科における教育内容と、当該学部の学士課程における教育内容の適切性

「国際協力と国際組織」「国際交流と社会」「現代社会と文化」の三領域から構成されている教育内容は、基本的に学部教育の系統性の上に作られており、教育内容における両者の関連性は高い。

大学院教育は、少人数のマン・ツー・マン教育体制によって、大学院生個々人の研究領域やテーマに即した問題関心をより鮮明にして研究を推進させていく点での大きなメリットがある。

専攻分野に関する先行研究の整理や分析の成果、あるいは独自の観点でのフィールドワークや調査に裏打ちされた修士論文にみられる研究水準の高さがこのことを実証している。

両者の関係

本研究科は、国際社会システム研究科という名称であることから、学部における国際理解コース、京都学・観光学コース、ライフマネジメントコース、ビジネスマネジメントコース、法システムコースの5コースの内の国際理解コースにのみ対応する大学院ではない。

国際社会システム研究科の専任スタッフおよび教授内容は、基本的に法システムコース(大学院発足後に設置)をのぞいた4コースに対応するものとなっている。その意味では、内容上、学部基礎を置いた大学院としての実態を持っているので、学部における学習内容を踏まえて、より高度かつ発展的な研究を納めることができる体制となっているので、学部と大学院との関係は有機的に連結している。

【生活科学研究科 食物栄養科学専攻 修士課程】

学部基礎を置く大学院研究科における教育内容と、当該学部の学士課程における教育内容の適切性

生活科学部食物栄養科学科は、個々の食生活から個々をとりまく食環境に至るまでを視野に入れ、科学的な思考力をもって教育・指導できる人材を育成する「食物科学専攻」と生きて行く上での人間の食生活を総合的かつ有機的に関連づけて学び、科学的に分析、理解し、適切な栄養アセスメント・指導・マネジメントができる管理栄養士を養成する「管理栄養士専攻」の2専攻からなる。

また、大学院生活科学研究科に設置している「食物栄養科学コース」は「食品学」「調理学」「栄養学」の三分野に分けて科目を設定し、「食」に関する実験を中心とした研究活動を展開することで、研究能力はもとより「食」についての高レベルな専門知識を兼ね備えた専門的職業人としてのセンスを養うことを教育目標としている。一方、「臨床栄養学コース」は病態栄養学を中心とした講義科目、高度先進医療を実施している病院での1年間のインターンシップ、

医師と協力しておこなう病態栄養の症例研究などを通じて管理栄養士の知識と技術を磨くことを教育目標としている。

したがって、「食物科学専攻」の延長線上に「食物栄養科学コース」が存在し、「管理栄養士専攻」の内容を深めるために「臨床栄養学コース」が設置されているといえる。これらのことを鑑みたとき学部基礎を置く本研究科としては、その教育内容は当該学部の学士課程の各専攻に依拠したものであり、発展させたものである。

したがって、本研究科と当該学部は厳密で連続性のある関係下にあるものと判断できる。

両者の関係

「食物科学専攻」の延長線上に「食物栄養科学コース」が存在し、「管理栄養士専攻」の内容を深めるために「臨床栄養学コース」が設置されており、学部基礎を置く大学院研究科となっている。

- 修士課程における教育内容と、博士（後期）課程における教育内容の適切性及び両者の関係（A群）大学院
- 博士課程（一貫制）の教育課程における教育内容の適切性（A群）大学院

【文学研究科 英語英文学専攻】

修士課程における教育内容と、博士（後期）課程における教育内容の適切性

英語英文学専攻は、英米文学・文化と言語学・応用言語学を中心とした教育課程であり、このことは前期課程と後期課程においては一貫した大きな柱であり両者には深い関連性がある。

たとえば、博士課程（前期）の英米文学研究は作品を中心とした研究に重点を置き、博士課程（後期）では、文芸批評理論と作品・作家の研究に重点を置き、深い関連性を持たせている。言語学・応用言語学でも博士課程（前期）では、文法理論の基礎に重点を置き、博士課程（後期）では、普遍文法理論の研究に重点を置いている。

両者の関係

上記の教育内容のとおり、両者は深く関連性を持たせながら、博士課程（後期）では、さらに高度な内容となっており、両者の関係は適切であると考ええる。

【文学研究科 日本語日本文化専攻】

修士課程における教育内容と、博士（後期）課程における教育内容の適切性

博士課程（前期）においては、4つのコース（日本文学・日本文化コース、日本語・日本語教育コース、音楽文化コース、情報文化コース）を設けており、それぞれの分野における専門性を高めるとともに、他の分野の学問についても積極的に学ぶことが要請されている。

こうした履修指導によって修得した知識と方法を、有機的に関連させて新しい「日本文化史研究」「日本文化方法研究」「日本文化内容研究」を目指すのが博士課程（後期）である。

両者の関係

前述のように、両者は、単にその研究の深度を深めるといった関係ではなく、内容・方法ともに発展的に研究を展開させる関係にあるものであり、両者は高度の関係において適切であるといえる。

ただし、博士課程（後期）では、現在、8 単位を修得することを義務づけているが、日本語と日本文学の分野においては問題ないものの、日本文化と芸術文化の分野においては、対応科目が 4 単位しかない。

- 課程制博士課程における、入学から学位授与までの教育システム・プロセスの適切性（A 群）
大学院

【文学研究科】

課程制博士課程における、入学から学位授与までの教育システム・プロセスの適切性

課程制博士課程を設置しているのは、本学では文学研究科のみである。入学試験としては、一般入学試験を設定し、日本語日本文化専攻においては、社会人入学試験、外国人留学生入学試験を行っている。試験科目は、専攻により異なり、英語英文学専攻は、英文による小論文、英文和訳、口述試験、日本語日本文化専攻は、面接のみとしている。

科目履修については、指導教授の指導を受けるものとし、博士課程（後期）の科目 2 科目 8 単位を取得しなければならない。場合によっては、指導教授の指示により、博士課程（前期）の科目を履修することができる。最終的に課程博士の学位を得ようとする者は、所定の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けたうえで、博士論文の審査および最終試験に合格しなければならない。

これまで課程博士の学位を授与したのは、英語英文学専攻では英文学の分野で 2 名、日本語日本文化専攻では日本語の分野で 1 名のみにとどまっており、その他の分野においては、いまだ課程博士の学位を授与できていない。

これは、博士の学位を授与するまでの組織的な教育体制を構築できていず、本人の努力に委ねられていることに原因があろう。今後は、入学試験のあり方を含めて、学位授与に至るまでの過程を組織的に検討し、効果的な教育プログラムを整備する必要がある。

（単位互換・単位認定等）

- 国内外の大学等と単位互換を行っている大学院研究科にあっては、実施している単位互換方法の適切性（B 群）大学院

「同志社女子大学大学院学則」第 10 条第 2 項および第 3 項において、

「2 学生は別に定める規定により、他大学において当該大学院の授業科目を履修することができる。また、教育上有益と認められるときは、他の大学院または研究所等において必要な研

究指導を受けることができる。

ただし、修士課程または博士課程（後期）の学生について認める場合には、当該研究指導を受ける期間は、1年を超えないものとする。

3 第2項の規定により履修した授業科目は、研究科委員会の議に基づき10単位を超えない範囲で課程修了の所定単位としてこれを認定する。」

と規定しており、具体的には2002年よりThe University of Massachusettsとの間に大学院生交流プログラムを実施するための協定や、1年以内の留学で10単位を限度とした単位認定を行う認定大学院留学制度を設けている。前者については、これまでの実績を伴わず、充実したプログラムの実現が課題である。

また、本学大学院内では英語英文学専攻博士課程（前期）と日本語日本文化専攻博士課程（前期）国際社会システム専攻の修士課程におけるB類科目に限り、相互に8単位から16単位の範囲で単位互換制度を運用している。

（社会人学生、外国人留学生等への教育上の配慮）

○社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導への配慮（A群）大学院

本大学院では、博士課程（前期）および修士課程においては全ての研究科で、博士課程（後期）においては日本語日本文化専攻で、社会人入学試験、外国人留学生入学試験を行っている。

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（前期）】

社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導への配慮

社会人に対する制度は、2005年度に設けたが、学生は現在いない。外国人留学生に対する制度は、1998年度に制度として設けているが、学生はいない。
--

したがって、現在のところ、特別な配慮はなされていない。

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（後期）】

社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導への配慮

上記の制度は設けていない。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（前期）】

社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導への配慮

博士課程（前期）および博士課程（後期）ともに社会人、外国人を受け入れているが、社会人の場合、今出川キャンパスにサテライト教室を設け、働いている人のために夜間の授業を一部設けている。ただし、社会人がこれらだけを受講して修了できる体制にはなっていない。
--

外国人の場合、博士課程（前期）および博士課程（後期）ともに既に日本語に堪能な大学院

生であったこともあって、特に使用言語に関しての配慮は行っていない。ただ、外国人と日本人のものの見方・考え方の違い、指導法の違いからくる誤解にもとづく行き違いにきめ細やかに対応し、問題が生じないような研究指導体制の構築の必要性は感じている。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（後期）】

社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導への配慮

制度として確立したものはなく、指導教授個人個人の方法に多く拠っているが、一対一の関係に加え、複数指導制などの方法も導入した方がよいかもしれない。

【国際社会システム研究科 国際社会システム専攻 修士課程】

社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導への配慮

平成 18 年度入学生には、社会人 1 名、外国人留学生 2 名が含まれている。社会人は、職業経験に基づいた大学院での研究課題をもっており、また外国人留学生は、環境経営や観光学などの国際社会システム研究科の個性に合致した研究課題を持っている。

教育課程編成は、学部卒の通常の大学院生と区別はしていないが、外国人留学生の十分な日本語能力、社会人の実践的な研究計画を確認しており、教育研究指導もそれぞれの個別的状況に沿うように努力している。

【生活科学研究科 食物栄養科学専攻 修士課程】

社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導への配慮

生活科学研究科では、社会人、外国人留学生に対して門戸を開放している。しかしながら、「食物栄養科学コース」は特別に社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導は行っていない。

一方、「臨床栄養学コース」では、病態栄養学を中心とした講義科目、高度先進医療を実施している病院での 1 年間のインターンシップ、医師と協力しておこなう病態栄養の症例研究などを通じて管理栄養士の知識と技術を磨くことを教育目標としていることから、学部からの進学生のみならず、働く管理栄養士のキャリアアップも鑑みて設置された。実際、多くの管理栄養士が社会人学生として学んでいる（社会人学生の勤務先が、高度先進医療を実施している病院である場合は、職場で臨床研究などを行いインターンシップに置き換えている）。カリキュラムも仕事をしながら学べるように、開講科目は夜間開講となっている。ただ、午後 6 時 30 分からの開講となっているので、近隣に勤める管理栄養士でないと授業時間に間に合わず、希望者がいても生活科学研究科所在地より少し離れたところで働く管理栄養士は、通学ができない状態にある。

今後、土日開講およびサテライト方式などを模索することで、広範囲に希望する社会人入学者を受け入れられるように整備することが課題である。

（生涯学習への対応）

- 社会人再教育を含む生涯学習の推進に対応させた教育研究の実施状況（C群）大学院

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（前期）】

社会人再教育を含む生涯学習の推進に対応させた教育研究の実施状況 制度を設けていない。

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（後期）】

社会人再教育を含む生涯学習の推進に対応させた教育研究の実施状況 制度を設けていない。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（前期）】

社会人再教育を含む生涯学習の推進に対応させた教育研究の実施状況 大学院修士課程を修了した社会人を研究生として受け入れており、夜間の授業を実施している。その際に、研究生の関心に対応した教育研究なども行っている。ただし、その数は少ないが、2009年度より、市内(今出川キャンパス)に移転する予定であり、希望者の増大が予想される。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（後期）】

社会人再教育を含む生涯学習の推進に対応させた教育研究の実施状況 現在、該当学生は居らず、特に記すべきことは行っていない。ただし、博士課程（前期）で述べたように、2009年度より、市内(今出川キャンパス)に移転する予定であり、希望者の増大が予想される。
--

【国際社会システム研究科 国際社会システム専攻 修士課程】

社会人再教育を含む生涯学習の推進に対応させた教育研究の実施状況 社会人再教育や生涯学習の推進は、職業経験を持った社会人の大学院への入学として実現している。当該の社会人は、職業的技能の習熟を目的としての入学である。国際社会システム研究科の社会的役割の向上に更につなげていくためには、現代こども学科が対応できる領域での大学院体制の整備が必要であろう。 たとえば、社会人再教育わけでも現職小中学校教員のリカレント要求に対応した体制整備を推進する必要がある。社会的にも大きな需要がある分野なので、今後の課題として現実的な対応を計画中である。
--

【生活科学研究科 食物栄養科学専攻 修士課程】

社会人再教育を含む生涯学習の推進に対応させた教育研究の実施状況

生活科学研究科に設置されている「食物栄養科学コース」および「臨床栄養学コース」とも社会人の再教育に貢献できるよう、社会人に対して門戸を開放している。

「食物栄養科学コース」では、過去数名の30代の社会人を受け入れ大学の助手として送り出した経験を持つ。

「臨床栄養学コース」はその教育目的・カリキュラムからキャリアアップを意図する働く管理栄養士が仕事をこなしながら（社会人学生の勤務先が、高度先進医療を実施している病院である場合は、職場で臨床研究などを行いインターンシップに置き換えている）、席をおけるように配慮されている（講義は、夜間開講されている）。このことは、職場で感じた様々な疑問や迷いをすぐに学びの場で解消・解決することができ、本人のスキルアップに繋がることを示している。

以上のことから生活科学研究科は、社会人再教育の場としての責務を十二分に果たしているものとする。生涯教育には、今のところ取り組んでいないが、今後、リレー方式の公開講座などを一般社会人対象に開くことで貢献していきたい。

（「連携大学院」の教育課程）

- 研究所等と連携して大学院課程を展開する「連携大学院」における、教育内容の体系性・一貫性を確保するための方途の適切性（B群）大学院

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（前期）】

研究所等と連携して大学院課程を展開する「連携大学院」における、教育内容の体系性・一貫性を確保するための方途の適切性

制度を設けていない。

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（後期）】

研究所等と連携して大学院課程を展開する「連携大学院」における、教育内容の体系性・一貫性を確保するための方途の適切性

制度を設けていない。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（前期）】

研究所等と連携して大学院課程を展開する「連携大学院」における、教育内容の体系性・一貫性を確保するための方途の適切性

制度を設けていない。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（後期）】
研究所等と連携して大学院課程を展開する「連携大学院」における、教育内容の体系性・一貫性を確保するための方途の適切性 制度を設けていない。

【国際社会システム研究科 国際社会システム専攻 修士課程】
研究所等と連携して大学院課程を展開する「連携大学院」における、教育内容の体系性・一貫性を確保するための方途の適切性 制度を設けていない。

【生活科学研究科 食物栄養科学専攻 修士課程】
研究所等と連携して大学院課程を展開する「連携大学院」における、教育内容の体系性・一貫性を確保するための方途の適切性 「臨床栄養学コース」における「臨床栄養学特別研究」（インターンシップ）の実施の場として契約を結んだ病院を連携大学院と定め、指導医師を客員教授とし、病院の管理栄養士の協力も得ることにより教育内容の充実を図っている。 具体的なカリキュラムは、各病院により異なるが、各カリキュラムとも、大学と現場のニーズを反映させた充実した教育内容となっている。

（研究指導等）

- 教育課程の展開並びに学位論文の作成等を通じた教育・研究指導の適切性（A群）大学院

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（前期）】
教育課程の展開並びに学位論文の作成等を通じた教育・研究指導の適切性 文学研究科英語英文学専攻博士課程（前期）に置かれている授業は、A 類科目群と B 類科目群とに分かれ、A 類科目群を担当するのは、修士論文作成の指導教員となりえる専任の任用教授である。この A 類科目群には、英米文学と言語学の「特殊研究」が置かれており、文学を修士論文のテーマとする者は英米文学の「特殊研究」から 3 科目 12 単位を必修とし、言語学を論文のテーマとするものは言語学の「特殊研究」から 3 科目 12 単位を必修しなくてはならない。その科目の選択については論文指導教授と相談し、その許可を得て決定される。 論文指導の時間は、特に設定されておらず、学生の研究の進捗状態により、本人の申し出るいは教員の判断によって適宜行われている。そうした個別指導とは別に、1 年次の 6 月に修士論文の研究計画書を提出し、2 年次の秋には修士論文の内容の中間発表会を行っており、学生に参加を義務づけている。この発表会は公開であり、他の分野の教員からも指導助言を得られるようにしている。

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（後期）】

教育課程の展開並びに学位論文の作成等を通じた教育・研究指導の適切性

文学研究科英語英文学専攻博士課程（後期）では、英文学・米文学・比較文学・言語学・英語学の「特別研究」の授業が設置されており、それらの「特別研究」の中から2科目8単位以上を履修したのちに、「論文指導」を受けることになっている。また、指導教授の指示により、博士課程（前期）の科目を履修することができることになっている。これは、研究の幅を広げるためである。

博士課程（前期）で行っているような公開の研究発表会は行っておらず、指導教員による一対一の論文指導が中心である。博士課程（後期）の論文指導の場合、むしろこの方が学問的にも専門に分け入った指導が可能であり、適切であろう。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（前期）】

教育課程の展開並びに学位論文の作成等を通じた教育・研究指導の適切性

文学研究科日本語日本文化専攻博士課程（前期）に置かれている授業は、A類科目群とB類科目群とに分かれ、A類科目群は日本文学・日本文化コース、日本語・日本語教育コース、音楽文化コース、情報文化コースに分かれており、修士論文作成の指導教員となりえるものによって担当されている。学生が論文を書くためには、まず研究テーマが属する分野のコースの科目群から3科目を履修しなければならない。その科目の選択については、論文指導教授と相談し、その許可を得て決定される。

論文指導の時間は、特に設定されておらず、本人の申し出と指導教員の判断によって適宜行われている。そうした個別指導とは別に、英語英文学専攻と同様に、1年次の12月に修士論文の研究計画概要の発表会を行い、2年次の夏には修士論文の内容の公開中間発表会を行っており、学生に参加を義務づけている。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（後期）】

教育課程の展開並びに学位論文の作成等を通じた教育・研究指導の適切性

文学研究科日本語日本文化専攻博士課程（後期）では、日本語・日本文学・日本文化・芸術文化についての「特別研究」の授業を設置しており、それらの「特別研究」の中から論文指導教員の担当する科目を含む2科目8単位以上履修したのち、学生は「論文指導」を受けることになっている。また、論文指導教員の指示により、博士課程（前期）の科目を履修し、研究の幅を広げることを要求されることもある。

博士課程（前期）で行っているような公開の研究発表会は博士課程（後期）では行っていないが、論文指導教員による論文作成指導は、授業時以外にも各指導教員の主催する研究会においても行われている。

【国際社会システム研究科 国際社会システム専攻 修士課程】

教育課程の展開並びに学位論文の作成等を通じた教育・研究指導の適切性

国際社会システム研究科は、専任スタッフが担当する A 類科目と学外者による B 類科目のうちから 32 単位を修得する仕組みとなっており、入学を許可された大学院生は、入学後 4 月第 3 水曜日までに所定の様式に基づいて指導教員願いを提出することになっている。

また、履修科目の選定にあたっては、指導教員の指導のもとにこれを行っており、計画的かつ専門的な履修が可能となるように配慮している。また、学位論文についても、修士論文題目登録書の書式を定めており、計画的に修士論文が作成可能なように指導している。

【生活科学研究科 食物栄養科学専攻 修士課程】

教育課程の展開並びに学位論文の作成等を通じた教育・研究指導の適切性

生活科学研究科教育課程としては、「食物栄養科学コース」では基本的に「食品学」「調理学」「栄養学」の三分野に分けて科目を設定している。

また、「臨床栄養学コース」では、病態栄養学を中心とした科目と連携大学院として提携している病院での 1 年間のインターンシップを設定している。「食物栄養科学コース」の科目はすべて選択で、学生の専門性または、研究テーマに合致した内容の科目を自由に受講できるようになっている。「臨床栄養学コース」は専門性を重視していることから科目のほとんどが、選択必修である。

両コースに所属する学生は、その所属コースにかかわらず他のコースの科目（インターンシップは省く）を受講し、見聞を広げることができるようになっている。これらが、各学生の専門的な研究を続けて行くための礎を形成している。

生活科学研究科学学生の学位論文に関する指導は、「食物栄養科学コース」の場合、研究指導教員である専任の大学院任用教授が学生一人一人に配置される。学生は、指導教員の研究室にてほぼ毎日実験研究を行うものであるため、学生と指導教員の関係は緻密となり指導も的確にかつ詳細に行われている。

「臨床栄養学コース」においても、研究指導教員である専任の大学院任用教授（その性格上、医師または、管理栄養士の資格を持つ）が学生一人ひとりに配置される。しかし、病院での 1 年間のインターンシップ（社会人学生の勤務先が、高度先進医療を実施している病院である場合は、職場での臨床研究など）を課しているために、現場での指導教授が必要となることから連携先の病院の医師を客員教授とし、インターンシップ中の指導を依頼している。インターンシップ終了後は、研究科の指導教員が客員教授と緊密に連絡をとりながら、修士論文またはそれに代わる研修報告としてケースレポートをまとめている。

このように、生活科学研究科では、個々の学生と個々の指導教員の関係は、緊密であり、指導上困難になる事態は、今のところ見られず、教育・研究指導は適切に行われている。

○ 学生に対する履修指導の適切性（A群）大学院

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（前期）】
学生に対する履修指導の適切性 入学後の学内オリエンテーションにおいて履修相談を行っている。その際、授業や研究に対する取り組み方を指導し、学修の基本的な心構えについても説いている。しっかりと授業と課題に取り組むため、一年次では18単位程度を登録し、2年次に残り12単位程度を登録するように指導してきた。また、1年次の6月には研究課題を正式に提出させて、指導教授を決定している。 以上のことから、履修指導は適切に行われていると考える。

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（後期）】
学生に対する履修指導の適切性 2科目8単位を最低取得する必要があるが、その履修については論文指導教授と相談した上で決定される。 また、授業以外の時間を論文作成や学会やレフリーのある学会誌に投稿するように勧めている。特に制度としてもうけられたものはない。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（前期）】
学生に対する履修指導の適切性 入学直後の学内オリエンテーションにおいて、各分野を代表する博士課程前期運営委員会の教員全員が、大学院生の研究テーマを聞き、それぞれの立場から研究を進める上でのアドバイスを行っている。これは、各自の研究テーマが他の分野の研究とどのような関連を持つかを理解させるのに有効である。その後、直接指導する教授によって具其他的な履修相談が行われており、指導の適切性については問題ないと考えている。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（後期）】
学生に対する履修指導の適切性 博士課程（前期）の場合と同じく、入学直後のオリエンテーションにおいて履修相談が用意されているが、実際には論文指導に予定されている教授との個別相談によって登録指導が行われている。その際、学生が進めようとしている研究の必要に応じて、博士課程（前期）の授業を取ることも指導している。

【国際社会システム研究科 国際社会システム専攻 修士課程】
学生に対する履修指導の適切性 履修指導は、指導教員によって行われ、大学院生の研究テーマに即した科目の系統的履修と

なるようにしている。

また、大学院生の履修科目については研究科委員会で確認できるように工夫しており、指導教員のみに留まらず研究科全体で大学院生個々の履修体系を把握すべく体制を整えている。また、研究分野によっては、大学院以外の外部にある研究会や学会組織などへの参加や共同研究を積極的に指導している。

【生活科学研究科 食物栄養科学専攻 修士課程】

学生に対する履修指導の適切性

生活科学研究科は、「食物栄養科学コース」と「臨床栄養学コース」の2コースを擁していることから、各コースで科目が異なる。そこで研究科入学時に混乱が生じないようにオリエンテーションを行い、履修指導を徹底している。特に選択の幅が多い「食物栄養科学コース」では、指導教員の専門性を活かした研究がなされるために「食品学」「調理学」「栄養学」の三分野のうち、研究に重要と考えられる科目が学生により選択される。また、両コースとも相互に科目を選択できる（インターンシップは省く）ので、興味ある科目を学生は選択しうる。

これらの詳細な履修指導に関しては、指導教員との緊密な話し合いの上、行われており、本研究科の履修指導は適切に行われているものと判断される。

○指導教員による個別的な研究指導の充実度（B群）大学院

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（前期）】

指導教員による個別的な研究指導の充実度

指導教員との個人的な研究指導は、定期的に行っている。さらに、大学院生は定期的に研究内容を中間発表という形で（年2回）最低1回は報告するように奨励している。

この機会は、学生にとって、論文作成上の自己点検の機会となるので、緊張感と切迫感が伴いはするが効果的に機能している。

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程（後期）】

指導教員による個別的な研究指導の充実度

博士課程（後期）の学生にとっても研究を活字の形にすることは自分の研究を客観的に評価するための最も有効な手段である。

学内紀要、学会誌などへの投稿や、学内外の専門分野の学会での発表が折に触れて推奨され、細かい指導がなされている。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（前期）】

指導教員による個別的な研究指導の充実度

指導教員によって、学会での発表や学会誌への投稿について指導がなされているが、その具

体的な指導のあり方は個々の教員にゆだねられている。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（後期）】

指導教員による個別的な研究指導の充実度

博士課程（前期）と同じく、個々の教員にゆだねられている。学内紀要、学会誌などへの投稿や、学内外の専門分野の学会での発表が折に触れて推奨され、細かい指導がなされている。

【国際社会システム研究科 国際社会システム専攻 修士課程】

指導教員による個別的な研究指導の充実度

個々の院生の研究テーマに即して、踏み込んだ研究指導がなされつつあり、たとえば海外におけるフィールド調査や修士論文のテーマに即した社会調査などの立案・実施などが指導教員の指導のもとに展開されており、その成果が学会発表などに結実している。

【生活科学研究科 食物栄養科学専攻 修士課程】

指導教員による個別的な研究指導の充実度

生活科学研究科は、実験や現場でのインターンシップを基礎としている大学院である。したがって、まず「食物栄養科学コース」を選んで入学した学生は、個別に指導教員につき、毎日の実験を通じて研究を推し進めて行く。この形態は、おのずと学生と指導教員とのコミュニケーションを緊密なものとし、個別的な研究指導の充実度は高い。

一方、「臨床栄養学コース」では、1年次に病院での1年間のインターンシップに赴く（社会人学生の勤務先が、高度先進医療を実施している病院である場合は、職場での臨床研究などを行う）ため、連携先の病院にいる客員教授による研究指導を受けることとなる。実習は、毎日のことであるので、客員教授による研究指導は、おのずと緻密なものとなっている。

また、インターンシップ中も学生、病院での客員教授、生活科学研究科の指導教員との間で、意見交換が頻繁に行われている。インターンシップ（社会人学生の場合、職場での臨床研究などの）終了後、生活科学研究科の指導教員の下で、インターンシップ先で行った病態栄養の症例研究を修士論文またはそれに代わる研修報告としてケースレポートをまとめるにあたって、三者での意見交換が頻繁に行われていることもあり、継続性をもって生活科学研究科の指導教員が、指導している。

以上、「臨床栄養学コース」においても個別的な研究指導の充実度が増す努力が積み重ねられている。